

## 就職活動を振り返って 『面白くするのは自分次第』

株式会社キーエンス  
マーケティング事業部 商品開発 Gr.  
船橋 駿斗 (M63)



私は 2019 年に機械工学専攻の博士後期課程を卒業し、(株)キーエンスに入社しました。卒業年度が近いので、在校生の方にとって私自身の経験が参考になればと思い、執筆をお引き受けしました。思い描く人生設計は人によって様々ですが、本稿では自身の振り返りを通じて、大学時代に学んだ普遍的で重要と考える要素を紹介できればと思います。

改めて自己紹介しますと、私は 2011 年に工学部機械工学科に入学しました。当時の入学理由は「一般的な技術を学べば就職には困らないだろう」といった安易な考えで、入学試験の順位も恐らく下から数えた方が早く、何とか卒業できれば良いと思っていました。しかしながら、後述する 2 つの出会いが自身の考え方を換え、結果として就職活動にも影響を受けました。

1 つ目は入学時から所属した“学生フォーミュラチーム FORTEK”です。これは 1 年間に 1 台フォーミュラカーを学生自身で設計・製作し、大会に出場してタイム等を競うサークル活動です。入部当時はものづくり自体に正直それ程興味はありませんでしたが、F1 が好きだったこともあり経験を積んで自動車会社に入社できればラッキーという気持ちで入部し

ました。しかし、ただ F1 を観戦していただだけの人間が上手く設計できる訳がありません。入部 2 年目の大会時に、設計した空力デバイスが破損してしまい、メイン競技をリタイアしてしまいました。自分の設計ミスが原因で、仲間と作り上げたマシンを壊してしまったという後悔に苛まれ、次にどう活かすせば良いのかもわからない状況でした。宿に戻った後、応援に来てくれた OB の方から力学的になぜこの設計に欠陥があったのかを論理的に説明され、ものごとには原理原則があり、この失敗は起こるべくして起きたことを感じました。この時の反省は次年度に反映され空力デバイスの設計は大きく改善されました。この時から、ものづくりの手段として学問や物事の本質を捉えること自体に面白さを感じ始めました。

2 つ目の出会いは学部 4 年次から所属した富山明男教授の混相流工学研究室です。フォーミュラにのめり込んでいた私は、研究はそこそこで良いと考えていました。フォーミュラのために、別の大学を考えていたため、研究室に配属されて直ぐに富山先生に「大学院は別の大学や海外に行きたい」と伝えました。富山先生からは全く否定されることもなく「とりあえず研究もやってみたらいい。海外の大学院には研究しながらでも行ける」と伝えられました。口達者な先生なので、今思えば上手く丸め込まれた気もしますが、一旦研究を本気でやってみることにしました。研究テーマは原子力発電システム内の熱流動を模擬した空気と水が混ざり合って旋回を伴って移動する流れの研究でした。基礎研究に近いながらも、どうすれば上手く空気と水を分離できるかなど、ものづくりに近い要素も含まれており、この研究は捉え方によっては空力デバイスを設計していた自分の嗜好とマッチしていることに気づきました。結果としてこの研究室で物事を深く追求する力をつけたい、研究に取り組むことが自身が一番成長する手段と思い始め、博士課程後期課程まで進学することになります。配属当時のモチベーションからすると我ながら驚きです。

さて就職活動の話に移りますが、私の経験から言

える重要な要素は目の前の物事に対して“面白くなるようにやってみること”です。ただし、自分が面白いという事だけをやるのではなく、人から受けた仕事も面白くなるように捉えることです。私自身もそうでしたが、確固たる夢や動機を持って行動できる人は少ないです。人生は多くの場合、受動的に発生する物事に対処することになります(例えば宿題やバイト先で受けた仕事なども)。一つ一つを面白く捉えていった結果、徐々にその中から本当に自分が面白いと思える要素が出てくるはずです。

現在の会社も就職活動開始時は志望していませんでした。面接を早期に受けられると聞き、練習のつもりで向かった説明会で自分の思考とマッチしていて面白そうと感じたのがキッカケです。就職は人生のゴールではありません。あくまで自分の人生を面白くする手段の一つと思って楽しみながら就職活動に望んでみてください。やりたい事が無ければ、自分で起業するのだから悪くないはずですよ。

現在はレーザーマーカの商品開発に関わっています。学生時代の勉強とは異なる技術や視座が要求されますが、大学時代に学んだ本質を追求する力は今も役立っていると感じます。自身の技術範囲が広がることを楽しみながら、更なる成長の形があると展望しています。何も挑戦しない人生を選ぶことも出来ませんが、折角なら挑戦してみるのはどうでしょう。

最後となりますが、神戸大学工学振興会(KTC)事務局を始めとした関係者の皆様に寄稿の機会を頂戴したことに感謝申し上げます。KTCの皆様にはフォーミュラと研究時代に多大なるご支援を賜りました。微力ながら本稿が恩返しとなれば大変嬉しく思います。